

実験の妥当性 1

実験結果を検討する前に、サーベイ実験が成功していたかについて以下の通り確認した。ここでは、3つの実験群がうまくランダム化できたかを確認する。図1は、Rに用意されたBalanceRを利用し、性別・年齢・政治関心・教育程度・都市規模について、標準化バイアス診断を行った結果を示している。標準化バイアス診断では、一般的に、標準化スコアが絶対値25を基準（Ho et al., 2011）¹として、各実験群のスコアが25以内に収まっているかどうかで、共変量のバランスングをテストする。この点を踏まえて図1を確認すると、どの実験群ごとの標準化スコアもすべて基準をクリアしている。すなわち、本実験のランダム化は一定程度成功しており、共変量はうまくバランスングしていたと見ることができる²。

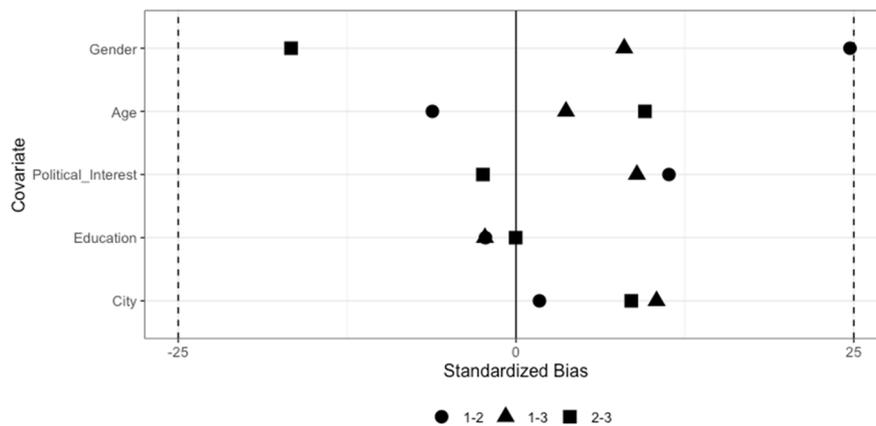


図1 バランスチェックの結果

実験の妥当性 2

サーベイ実験の内的妥当性の確認として、操作チェック（Manipulation check）についても検討した。ここでは、とくに半沢の敵として処置した伊佐山・三笠および箕部の感情温度が低いかどうかで、正確に「悪役」として判断されているかを確認する³。

図2は、処置群ごとの6アクターの感情温度を示したものである。一見して、悪役とさ

¹ Ho, D., Imai, K., King, G., & Stuart, E. (2011). MatchIt: Nonparametric Preprocessing for Parametric Causal Inference. *Journal of Statistical Software*, 42(8), 1 - 28.

² 図中の1/2/3の表記は、それぞれ処置群1/2/3に対応する。

³ 半沢直樹のストーリー上、白井は低くなることもあれば高くなることもある点には注意が必要である。

れたこれらの人物の感情温度は、半沢直樹（あるいは半沢の味方側）に比べても極端に低いことがわかる。具体的には、両処置群において、半沢直樹は80度近くとかなり好感を持っているのに対して箕部は29.5度、伊佐山は37.8度、三笠は33.0度と明確に低いことがわかる。なお比較対象として、実際の政治家では、菅首相は51.1度、安倍前首相は46.3度、枝野立憲民主党代表は37.5度、二階幹事長は30.6度、赤羽国交相は41.8度であった。

他方で、白井は同じ政治家群でも61.7度と高い値である。これは、最終回において白井は政治家としての良心を取り戻し、半沢側に「寝返った」事によるものと考えられる。これらの点からも、本実験におけるプライミングは実験前に想定されたとおりの方向であり、実験の内的妥当性は一定程度担保されていると考えられる。

また、いわゆる処置後バイアス（post-treatment bias）が生じないように、分析で用いる交絡変数の政治関心度を含めて、アウトカム以外の変数は、本実験前に測定している。

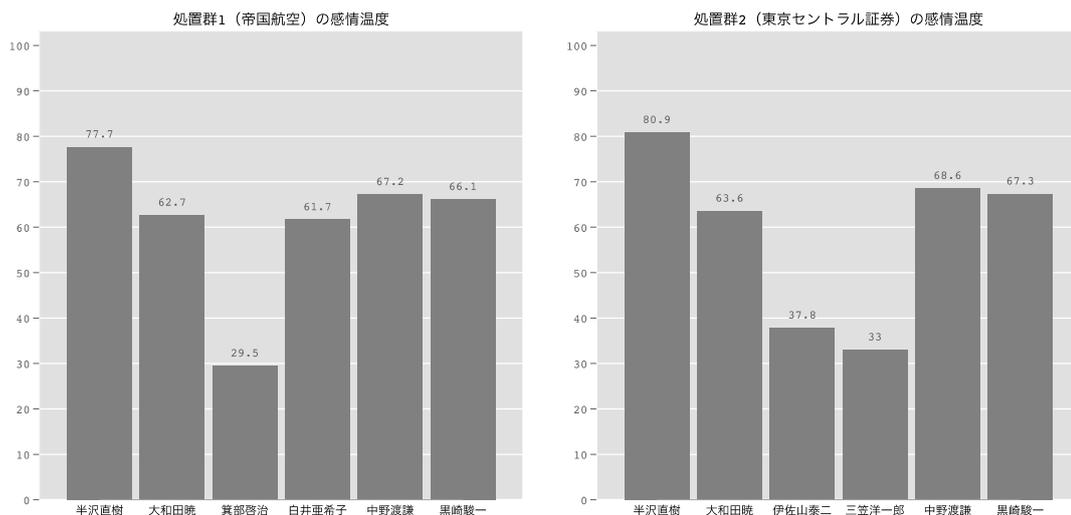


図2 操作チェックの結果